

発表題目：移動が照射する現代チベット：タンカ絵師が旅する歴史と現在

所属： 国立民族学博物館 外来研究員

氏名： 張 詩雋

1200字程度で発表内容を記載してください。

本発表はチベットの近代化、グローバル化、商品化という背景のもとで、タンカという宗教美術を制作する人々の多様な移動経験について考察するものである。

21世紀初頭、アパデュライをはじめ多くの人類学者はグローバリゼーションについて考察した。とりわけアパデュライはグローバリゼーションを5つのスケープ (-scape) —— 「エスノスケープ (ethno-scape)」「メディアスケープ (media-scape)」「テクノスケープ (techno-scape)」「ファイナンススケープ (financial-scape)」「イデオスケープ (ideo-scape)」として捉え、その多様性と流動性について分析した [アパデュライ 1996]。他方、フランス人類学者オジェは、世界中どこに行っても同じような光景が展開している場所ならぬ場所に注目し、「非-場所 (non-place)」という用語を用いてグローバリゼーションにより生じた普遍的で、均質かつ没歴史的な空間を考察した [Augé 1995]。以上のグローバル研究から影響をうけ、イギリス人類学者ハリスは、現代チベット人アーティストの移動経験を考察し、5つのスケープに「アートスケープ (art-scape)」を加えることを提唱する。さらに彼女は、高い流動性や一時的な人間関係が見られる、無垢なホワイト・キューブに代表される芸術世界を一種の非場所として考えている [Harris 2006, 2012]。

本発表はハリスがもつチベット人アーティストの移動経験への関心を共有する。しかしながら彼らの移動を一種のグローバリゼーションの産物として捉えるのではなく、その移動を導く歴史的・構造的な原因を考察したい。本発表が注目するタンカ絵師は、タンカ (*thangka*) というチベット文化圏を代表する宗教美術を作る人々である。タンカの請求・制作・崇拝は現地の宗教観念に密接に関係する。タンカの制作実践は経文に記載される数値的な基準のもとで神仏の像を制作する。タンカ絵師には、制作活動以外、巡礼を含む多くの移動が求められる。現地の考え方では、タンカ、神仏の身体、世界は同一的な関係にある。この考えに従うと一見タンカ制作に無関係な移動は、じつは絵師が体を測りものにして世界を認識し構築する実践ともいえる、タンカ制作そのものである。しかしタンカ制作の一環としての移動は、近代になって大きく変化する。1980年代以降、チベットには本格的な近代化が始まる。文化の商品化、無形文化財登録などの文化政策の推進や世界的な芸術市場との関わりといった事情に直面するタンカ絵師は、より多様な移動を経験するようになっていく。本発表はまず歴史上にチベット絵師の移動について考察し、世界を認識して構築する行為という移動の位置付けを明らかにする。次に近代化以降、中国における文化商品化や無形文化財登録に関連する政策を整理し、社会・文化的な構造の移動への影響を分析する。最後に青海、西藏、四川、香港などの地を旅する絵師たちの経験に注目し、現代チベット社会の動態を照らし出す。[参考文献 A. Appadurai 1996 *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalizations*. University of Minnesota Press; M. Augé 1995 *Non-places: Introduction to an Anthropology of Supermodernity*. Verso; C. Harris 2006 *The Buddha Goes Global: Some Thoughts towards a Transnational Art History*. *Art History* 29(4): 698-720; C. Harris 2012 *In and Out of Places: Tibetan Artists' Travels in the Contemporary Art World*. *Society for Visual Anthropology Newsletter* 28(2): 152-63.]